北の鉄道風景

Train number; 4010D
2022.6.1 16:43
1/50, f/11, ISO 200, f=70mm, Daylight/Sunny
5206×7809 Raw

第123回

若返りの薬

初夏の道東などというフレーズに、大きく広がった青空、若草の緑が続く原野、その向こうの大海原（おおうなばら）などをイメージしてはいけない。夏を迎えて暖かくなった空気が冷たい千島海流に洗われるこの地域に流れ込めば、ちょうど暑い日にビアガーデンで出された冷たいビールのジョッキに水滴がつくように霧になる。運が良ければそれが情緒あふれる姿をしてくれることもあろうが、大概はジメジメした空気が纏（まと）わりつく中で、どこがどこかわからないような風景を押し付けてくるだけだ。

道東地方は晴れ、の天気予報でもほとんどが朝晩は霧にご注意ください、と言う注釈が付く。こと写真について言えば、真っ昼間のトップライトよりも朝夕の斜光線が決め手になることが多いから、夏の道東で傑作を撮るのは難しいということになる。難しいということは、挑戦しがいがあるということだ、と格好をつけて出向いても、できあがったものは霧の日に近所で

早朝釧路に到着する夜行急行「狩勝7号」は、寝台車を連ねた美しい列車だったが、霧のベールに包まれ、その全容を捉えるのは難しかった。根室本線　1979

写真と文＝眞船直樹

撮ったんだろう、と言われればそれまでのようなものばかりだ。金と時間を不愉快さに投資する愚行と言われそうで、誰にも見せずに仕舞い込むことになる。

ある日、仕事で釧路に行った。案の定、重たい雲に覆われていた。仕事を終えるころには小雨模様になった。このまま帰れ、と言わんばかりの天気である。私は天邪鬼（あまのじゃく）だからそう言われると帰りたくなくなる。これが本当の姿なんだから、逃げたら負けだという意地も出てくる。女房に叱られるのを覚悟で、露の滴（したた）る草の中をズボンを汚しながらスナップし続けるうちに、懐かしい感覚が込み上げてきた。

霧の向こうに何かある。流れぬ雲はない。雨はいつかあがる――そうだった、若い頃の自分は、そういう思いで野山に出かけていったんだっけ。若いというのはそういう感覚だったんだ。それに気づけただけでここをウロウロした意味があった、と納得した。霧も雲も雨も、若返りの効力を失ってはいなかった。服用しなかっただけだ。